

イエス・キリストの受難の出来事、イエスが十字架にかけられ死なれた出来事は、多くの人々の「破れ」を露呈させた出来事でした。イエスと敵対していた律法学者やファリサイ派の人々は、自分たちに都合の悪い存在であったイエスをその妬みの感情のみで何とかして捕らえ殺してしまいたいと躍起になっていました。イエスの弟子の一人であったユダは、イエスをお金と引き換えに裏切り逮捕の手助けをしました。一番弟子としてイエスにつき従ってきたペトロは、イエスが逮捕された後、「お前もイエスの仲間ではないか」との疑いがかけられるやいなや、呪いの言葉すら口にしながら「そんな人は知らない」と三度もその関係性を否認しました。他の弟子たちもイエスが逮捕された途端に彼から離れ、散り散りに逃げました。ユダヤの総督であったピラトはイエスを裁判にかけた時、イエスの無実を分かっているながら自身の責任逃れのためにイエスに有罪の判決を言い渡しました。ローマの兵士たちはイエスに茨の冠をかぶせ、「ユダヤ人の王、万歳」と言って侮辱し、葦の棒で叩きつけたり唾を吐きかけたりしました。またイエスがエルサレムへやって来た時には、棕櫚の葉を地面に敷き「ダビデの子、ホサナ」と賛美しながら喜んでイエスを迎えた群衆たちは、裁判では「イエスを殺せ」「イエスを十字架につけろ」と叫び立て、イエスが十字架にかかってからは通りがかりに代わる代わるイエスを罵って侮辱の限りを尽くしました。当然ながらこれらすべては不当な行いでした。謂れのない暴力と侮辱のただ中にイエスは孤独の内に追いつめられました。イエスの十字架の出来事において、周囲の人々による筆舌に尽くしがたいほどの悪が、ただ一人イエスに向けられて行われたのです。彼一人を陥れるために、彼一人を殺すために、あらゆる人々が種々なる手段でその悪に加担し、そして同時に愚かさや心の醜さといった人間的な「破れ」をさらけ出していったのです。

イエスは周囲の人々の怨みつらみ・妬みそねみ、憎悪や傲慢、その他知る限りのあらゆる悪を一身に受けてその命を落とされました。これがどれだけの愚かしい行いであるかは言うに及ばないでしょう。そしてそれは時を超えた現代に生きる私たちにとっても決して他人事ではありません。私たちもまた、意識的に、時には無意識的に、かつてイエスを死に追いやったあの愚かさや心を染めることがあります。これは逃れ得ない人間の性とも言えるでしょう。私たちは本来的に罪なる存在である。教会の掲げるイエスの十字架はそのことを私たちに突きつけるのです。

しかし、神はそんな私たちにとって思いもよらない態度と大いなる御業を示されました。それがイエスの復活です。人々の悪意の濁流の中、殺されていった神の御子を神は復活させられたのです。イエスの死後、女性たちがイエスの墓を訪れると既に墓は空であったと福音書は記します。そして墓の中には「白い長い衣を着た若者」が座っていました。この若者は天使、神の使いのことでしょう。天使は言います。

「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」(6、7節)

弟子たちはイエスを裏切り、見放しました。これまで何者でもなかった自分に声をかけ

てくれたイエスを見捨てました。この人にならどこまででもついて行こうと心に誓ったそのイエスを否定しました。それも、こともあろうに我が身可愛さのためです。人に仕え、隣人を愛せよとの教えをすぐそばで聞いていたはずなのに、その教えの通りに生きた人のその生き様を間近で見えていたはずなのに、あまりに軽率に弟子たちはイエスとの関係性を手放してしまいました。それも自らの手で、イエスとの関係にピリオド=終止符を打ってしまったのです。このことが弟子たちにどれほどの激しい後悔と失意を与えたかは想像に難くありません。もう壊れてしまった関係性を修復しようにも無理と思うしかないのでしょう。どんな顔をして許しを請えばよいのか。ましてや、その許しを請う相手はもうこの世にいません。イエスとの関係性が失われたこと、否、自ら手放してしまったこと、イエスを十字架へと追いやってしまったことへの後悔と自責による失意と絶望の真ただ中に弟子たちはその身を置いていたでしょう。

そんな弟子たちに天使は——神は「ガリラヤへ行け」と言うのです。「ガリラヤで主に会える」と。あのガリラヤ、イエスと出会ったガリラヤ、イエスと共に活動したガリラヤです。イエスとの物語の出発点、そこで復活のイエスに会える。かつてガリラヤで「私についてきなさい」と言われたイエスとの再会が、そこに用意されている。これが弟子たちにとって再出発の道への促しとなりました。もう一度、イエスに出会い直す機会が与えられたのです。弟子たちのとった態度、姿勢は決して許されるものではありませんでした。ですが、神は彼らの罪を赦すのです。赦すために御子を死なせ、そしてよみがえらせたのです。愚かさや心の醜さといった人間的な「破れ」をさらけ出していった弟子たちに、そして私たちに、復活のイエスは再会してくださるのです。ピリオドが打たれ、よもや終わりとも思えた絶望の結末に、しかしその「続き」があること、ピリオドの向こうへ向かう導きがあることが示されたのです。絶望は絶望で終わらず、確かな希望へと変えられていく、本来ならばありえない舵取りが神の御手によって引き起こされた。——ここに神の御心があります。ここに人間の思いを遥かに超越した恵み、大いなる神の愛がありありと示されるのです。

イエスの十字架はすべての人間の罪のゆえ、それは現代の私たちも含めてのことです。私たちの罪のゆえにイエスは十字架で死なれました。しかし、そんな私たちの罪をも神は赦してくださる。それがイエスの復活の出来事です。私たちは罪人でありながら、同時に赦されている。それが神の下に生きるということです。私たちはどうしようもない罪人でありながら、一方で神にとってのかけがえのない存在である。ゆえにたとえ終わったとも思える道にも続きが示されるのです。そのことをこのイースターの礼拝において心に刻みたいと願います。そしてその全ては、神の愛の内にあることに心より感謝をしたいと思えます。この先どんなことがあったって、いつでも私たちには再会の道が用意されています。イエスと出会い直すその再会の道が、ピリオドの向こうへの促しが、神によって整えられているのです。そのことに心からの喜びをもって一緒に歩いて参りましょう。南山教会は今日より新しい節目に入り歩いていきます。その道中、絶望を希望に変えてくださる主に信頼し、神に心に向け直す歩みを、これから皆さんと共に進んでいくことができると心より願います。